

★書評・竹中千春著『ガンディー 平和を紡ぐ人』＝河内研一（埼玉AALA理事長）

歴史修正主義とは歴史改竄主義の異名である。歪んだ教科書検定は不都合な真実を国民の目から遠ざけようとする。その深刻さはモディ政権下のインドもまた同様である。与党インド人民党の支配する州にあっては、社会科教科書（州作成）にネルーの名は全く登場せず、ガンディーの死については語られない。それは彼らの支持母体、民族奉仕団（RSS）の青年による暗殺テロであり、今も暗黙の支持があるからである。

自伝を含め、数多のガンディー伝が世に出ている。「凡人には不可能だ」というネルーの戒めにもかかわらず、著者が描き出したかったのは「人間としてのガンディー」であった。元々新書版に収まる生涯とは思えないが、話題を絞り簡潔にその生涯を歴史の中で位置づけることで、読みやすい一冊となった。ジェンダー研究者でもある著者は、これまで忌避されがちだった彼の「ブラーフマチャーリヤ（性欲との闘い）」を、牽強付会かと断りつつも独自の見解を提示し紹介する。だが19歳の孫娘を裸にして添い寝させる「苦行」はやはり「奇行」の謗りを免れまい。孫娘マヌーにしてみれば、マハートマという絶対権威による拒絶不可能なセクハラ以外の何ものでもなかったはずだ。

この四半世紀のインドでは、ガンディー主義的な非暴力の不服従運動によって独立を達成したという「国民の物語」は色褪せ、軍事大国インドを求めるヒンドゥー至上主義ナショナリズムが闊歩し、ガンディーはもはや落ちた偶像であるかのようだと言者は論ずる。

著者はいう。「それと反比例するように、世界各地では、市民たちの民主的な運動のシンボルとして、ガンディーが立ち現れ」てきたと。それこそが彼の非暴力思想の普遍性であろう。ソローの論文Civil Disobedience（市民的不服従）を南アの獄中で読んだ彼は感動し、即『ヒンド・スワラージ』（1909年）にて紹介した。Satyagraha（常に真理と）として昇華された非暴力的抵抗運動は、著者が列挙するように世界各地へと伝播していった。キング牧師の公民権運動に先行する、沖縄での阿波根昌鴻の非暴力闘争も記憶に留めたい。塩ならぬ「乞食行進」や「陳情規定」の示す倫理性はサッティヤーグラハそのものといえる。今も沖縄の闘いの場には片仮名で「アヒンサー」（ヒンディー語で非暴力）の旗が翻る。

## 【追記】

本稿は『新英語教育』2018年9月号の書評欄に執筆したものである。モディ政権の危険性については、『日本 AALA 理論情報誌 第6号』で佐藤宏氏が的確な分析をされている。また今春のインド総選挙結果についても佐藤宏氏の分析が日本 AALA 機関紙の7月号、8月号に連載されている。また『経済』8月号には西海敏夫氏の選挙分析が掲載されている。西海氏は、社会的レベルでの「ヒンドゥー国家」化で、常軌を逸した例をいくつかあげている。UP 州の観光案内からタージ・マハルが（ムスリムの遺跡を理由に）意図的に外された例。ガンディー暗殺者のゴドセを「英雄」視する発言が、今や暗黙の支持どころではなく、BJP の国会議員からも上がり始めていること等々。同様の危機意識は『週刊金曜日』8月30日号が、「インド・ヒンドゥ右派政権に脅かされる『表現の自由』」として、インド映画『マントー』（2018）の女性監督ナンディタ・ダースへのインタビュー記事を掲載している。

（了）